平成24年3月23日　産経新聞より

「正論大賞」受賞記念大阪講演会　渡辺利夫氏

中国は遅れてきた帝国主義

第27回「正論大賞」（フジサンケイグループ主催）に輝いた拓殖大学総長・学長、渡辺利夫氏の受賞記念大阪講演会が22日、大阪市北区のリーガロイヤルホテルで開かれた＝写真（竹川禎一郎撮影）。

渡辺氏は「中国とどう向き合うか」をテーマに、伝統的な中国の国家秩序概念を踏まえて、現在の中国に対処する心構えを説いた。

渡辺氏は、中国はチベットやウイグル、モンゴルといった「華夷秩序」で周辺に位置した民族をも組み込んだ大清帝国の版図を継承したと説明。近代国家になる過程で利用してきたナショナリズムが対外膨張の背景にあるが、これは日本やドイツなども興隆期にたどった道だと解説した。

渡辺氏は中国を遅れてきた帝国主義国家と位置づけ、膨張には対抗する力が必要だと力説。しかし、日本外交の現状は「押せば引く」ことを中国に教えていると指摘し、憲法9条の改正などが重要課題に浮上してきていると主張した。

アジア経済研究の権威である渡辺氏は、中国の海洋覇権主義への警鐘など建設的な提言が評価され、正論大賞を受賞した。

■講演要旨

中国は膨張する経済力で急速な軍拡路線を進めており、東アジアを舞台にした地域覇権をいずれ掌握するだろう。「中国といかに向き合うか」こそ日本の命運を決するテーマとなろう。

現在の中華人民共和国はいかなる存在であるかを怜悧（れいり）にとらえておく必要がある。「大清帝国の後裔（こうえい）である」「遅れてやってきた帝国主義国家である」という2つの観点が重要だ。

大清帝国は漢族、満州族、モンゴル族、チベット族、ウイグル族を組み込んで中国史上最大の版図を擁した王朝だ。清の面積は明の3倍に達し、朝鮮、ベトナムを属領とし、極めて強い影響力を行使し続けた。

「中華」の権威と武力をもって君臨した王朝国家が大清帝国だった。

現在の中国が継承したのは大清帝国の版図だ。いまや100年の眠りを経て「華夷秩序」が復元し始めているようにも見える。

現在、国力と軍事力の増強、世界におけるそのプレゼンスの拡大が、中国人のナショナリズムを高揚させ、傲慢（ごうまん）で強硬な対外行動を繰り返すに至った。

興隆する大国がナショナリズムをもって対外膨張主義の時代に入ることは歴史に多くの事例がある。帝国主義時代における日本、ドイツ、米国の対外膨張はすさまじかった。中国はその意味で「遅れてやってきた帝国主義国家」なのだ。

尖閣諸島沖の中国漁船衝突事件における日本の指導部のぶざまな対応は、中国の膨張を「支持」する以外の何ものでもなかった。日本は押せば引く国だと学習させてしまった。

日米同盟の強化、集団的自衛権の行使容認、非核三原則の修正、何より憲法第9条改正、憲法前文の書き換えなどが、いまほど重要なテーマとして浮上している時期はない。いずれも日本人が決意すれば可能だ。